**〔解　説〕**

安永四年（一七七五）江戸外記座初演。松貫四、吉田角丸の合作。

江戸の町で実際に起こった夫殺しの事件を元に、お家騒動を絡ませています。歌舞伎、新内などにも同じ内容の作品があり、改作が多く生まれ「髪結新三」もその一つです。

**〔あらすじ〕**

　萩原家の子息千草之助は吉原の十六夜という遊女に入れあげ、家宝の茶入れをお家乗っ取りを企てる一味に盗まれます。茶入れ探索のために家を出た家老の息子・才三郎の恋人お駒は、実家に戻って意にそわぬ結婚をしますが、夫となった喜蔵が茶入れを盗んだ一味とわかり、取り戻そうとして殺してしまいます。夫殺しの罪人として鈴ヶ森の刑場に引き出されたお駒ですが、処刑寸前、悪事の一味がとらえられ、お駒の赦免状が届きます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**鈴ヶ森の段**

急ぎ行く。

人の身の捨てどころとや名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所。青竹にて矢来を構へ、あたりにきらめく抜身の鑓、かかりの役人馳せ違ひ、科人今やと待ちかけしは、この世からなる地獄の責め、忌はしくもまた恐ろしゝ。

あはれ見に寄る諸見物、あすこやこゝに立ち集り

「なんとこの科人も、モウ来さうなものぢゃ。おれは牢屋を引き出すとすぐに通町へ駆け抜け、それから河岸へ廻って以上四度見たが、さてマア美しい娘ぢゃわい。あれをころりとやるといふは、何とまあ、惜しいもんぢゃないかいの」

「アイヤ〳〵なんぼ顔が美しうても心は鬼ぢゃ。丙午ぢゃあるまいし、男を殺すといふことが、どこの国にあるものぢゃない」

「オイ〳〵〳〵さやう一途に云はしゃんな。女が男を殺すとはモよく〳〵堪忍のならぬわけ。間女房事であらうも知れぬ」

と噂とり〳〵口々に

「あんまり待って寒なった。の茶屋で一ぱいせう。サア〳〵ござれ」

と打ち連れて、皆々かしこへ走りゆく。思ふ事叶はねばこそ憂き事の、恋と義理との諸手綱。不憫やお駒は夫のため、かゝる憂き身の縛り縄。首にかけたる水晶の、数珠の数さへ消えてゆく。屠所の羊の歩みより、はかなき身ぞと観念し、力なく引かれ来る。代官堤弥藤次お駒に向かひ

「最前屋敷にて、役人中より申し渡されしごとく、仔細あるとは云ひながら、かりにも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも行なはるべきを、お上の御慈悲をもって死罪に仰せつけらるゝ。ありがたく存じ奉れ」

と云ひ渡せば顔を上げ

「なに事もみな私が心でかゝる身の罪科、露いささかもお上へ対しお恨みはござりませぬ。ありがとう存じます」

と覚悟極めし健気さに不憫と見やる諸役人、涙紛らすばかりなり。お駒は顔を振りあげて「御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大胆者、いたづら者と皆様の、お憎しみもあろけれど、云ふに云はれぬ訳あって、夫殺しの科人と、死恥さらす身の因果、不憫とおぼし一遍の、御回向願ひ上げまする。世上の娘御様がたは、この駒を見せしめと、親の赦さぬいたづらなど、必ず〳〵遊ばすなエ。可愛い夫へ義理立てば、二親に嘆きをかけ、また親々へ従へば、いひ交はした夫へ立たず、はてはかうしたあさましいこの世からなる剣の山、身を切り裂かれ憂き恥を、さらすも定まる因縁づく、約束事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る二親の、もしや群集のその中に見えはせぬか」

と伸び上がり〳〵ても竹垣の透間がくれの人群れに、目も泣きはれて見え分かぬ心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかりけり。『果てしはあらじ』と下部ども

「時刻移る」

と立ち出る。二人の親は竹垣に、隔てられたる親子の別れ、見物群集は口々に宗旨々々の手向草、折もこそあれ才三郎。丈八に縄をかけ、群集押し分け矢来のうち

「お預りの茶入れの盗賊喜蔵に紛れなき由、この丈八が白状ゆゑ再び茶入れもわが手に入る。また喜蔵、丈八両人はこの才三郎が親の敵。お上ヘ委細申し上げ、お駒が命赦免の状、御披見あれ」

と差し出せば弥藤次取って押しひらき

「成程々々紛れなき赦しの趣き。親の敵とあるからは喜蔵丈八両人は才三郎の心任せ。お駒はすぐに二親へ、御赦免なるぞ」

とありければ『はっ』とばかりに庄兵衛夫婦。夢に夢見し心地して、よろこび涙ぞ道理なり。お駒が縄目とく〳〵と、解けて結びし恋娘。千代も変はらぬ御恵み、重ね〳〵て黄八丈。昔語りを今ここに、伝ヘ〳〵し筆の跡。世々にその名を残しけり。